View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

研究ノート

異文化適応クラスにおける学生の意識変遷に関する調査

大味　潤

Cross-Cultural Education Effects on College ESL Students

OOMI, Jun

Abstract

The researcher has been conducting cross-cultural training in his ESL classes at Japanese four-year colleges. Though he has already examined various effects of his classroom activities in his previous researches, these researches were based on surveys in which the students gave their feedbacks only after finishing the course. Therefore, the researches never showed how the students were at the beginning and how they had changed through his classes.

The purpose of the survey was to investigate how college students changed through his course. In this research, the researcher planned to examine the effects of his classroom activities on three different times; before starting the course, when finishing the first semester, and after completing the two semesters. This paper presents the date of the first two of the three. The data demonstrated many aspects of the studentsÅf minds and indicated some ways to modify the direction of his research as well as his classroom activities toward the year end.

要　旨

この６年間、４年制大学の必修語学科目の英語クラスで異文化適応を主眼に対人コミュニケーション能力の養成を行ってきたが、これまでその成果は学期末のアンケートによる学習者の感想や、単発の数値データ、もしくは個別のインタビューによる聞き取り調査のみで、一年を通じての縦断的な学習者の意識の変化については具体的な検証を行ってこなかった。そこで今回は英語に対する学習者の考え方や異文化への許容度などを、学習前と前期終了後に調査した。さらに半年後、受講一年後のデータが揃って総括とするが、今回はその中間報告とし、現時点での考察と今後の方向性について論じたい。

キーワード

第二言語としての英語教育（Teaching English as a Second Language）
異文化教育（Cross-cultural Education）
英語コミュニケーション（English Communication）
大学英語教育（College English Education）

1.はじめに

2006年度以来、首都圏の大学数校でアメリカ西海岸英語を題材として、異文化理解を目的とする対人コミュニケーション能力養成の為の英語クラスを行ってきた。それら授業の成果はこれまで紙面によるアンケートや個別の聞き取りインタビューを中心に、週1回1年のコース、週2回1年のコース、また再履修者を対象とした週2回の複数年コース等、対象を変えてこれまで検証してきた（大味：2007、2010、2011A、2011B）が、いずれも該当クラス受講終了後の調査が中心だった為、学生の意識変遷、すなわち受講前の学生の英語に対する受容態度、英語力に対する考え方、またその心理状態がどのようなものであり、それが受講中にどう変化しつつあり、その結果どう変化したか、もしくはしていなかったについては推測の域を超えていなかった。その為、今回はこれまでと調査の切り口を変え、新学期の受講前、受講中（前期終了直後）、そして受講後（後期終了後）と3回に分けて学習者の意識を1年通して縦断的に調査することにした。授業は執筆中の現在も進行中なので、今回の発表は受講前と受講中、すなわち受講初日と受講４か月後の各データ、並びにその間の数値変化の分析に基づいた中間報告とする。

2.調査対象

2.1　対象クラス

今回調査対象としたクラスは、尚美学園大学の必修英語のうち、2012年度に筆者が担当している上福岡キャンパスの英語Ⅲ＆Ⅳの4クラス（情報表現学科）、川越キャンパスの英語Ⅰ＆Ⅱ（総合政策学部共通）の3クラスの計7クラスで、英語Ⅰ＆Ⅱ（各前期、後期）は1年生対象、英語Ⅲ＆Ⅳ（各前期、後期）は2年生対象であるが、今回は前期のみについての報告の為、各クラスは前期の呼称のみ、すなわち英語Ⅲと英語Ⅰを使う。

今年度の英語Ⅲには再履修生はいないが、英語Ⅰには数名の2年生が再履修として登録しており、また当クラスを以前に受講した者と全く受講経験が無い者がいる。これらの学生のデータが例外的な変数になる可能性もあったが、取り敢えず今回の中間報告のデータにはそのまま含めてある（詳細は「表2-1」参照）。

コース名称の後の〇囲み数字は、入学時のプレイスメントテストによる区分であり、数字の小さい方から成績の高い順となっている（参考までに情報表現学科の英語Ⅲは①～⑧まであり、総合政策学部の英語Ⅰは①～⑩まである）。すなわち英語Ⅲで担当しているクラスは英語力が比較的高い学生の集団であり、逆に英語Ⅰでの担当は所謂レメディアルクラスである。

表2-1　調査対象クラス並びに学生情報

科目名	学年	学部学科	4月回答数	7月回答数	特記
英語Ⅲ①	2年生	情報表現学科	20名	18名	再履修生0名
英語Ⅲ②	2年生	情報表現学科	22名	19名	再履修生0名
英語Ⅲ③	2年生	情報表現学科	19名	17名	再履修生0名
英語Ⅲ④	2年生	情報表現学科	20名	19名	再履修生0名
英語Ⅰ⑧	1年生	総合政策学部共通	14名	5名	再履修生3(3)名
英語Ⅰ⑨	1年生	総合政策学部共通	14名	9名	再履修生4(2)名
英語Ⅰ⑩	1年生	総合政策学部共通	15名	5名	再履修生1(0)名
			計124名	計92名	再履修生計8(5)名

＊総合政策学部は総合政策学科とライフマネージメント学科の2学科を含む
＊＊( )は7月に回答した学生のうち昨年当授業を受講した経験者である

2.2　調査内容

今回の調査内容としては、大きく分けて以下の7項目とし、紙面によるアンケートを実施した。各項目に該当する質問は、それぞれ右に挙げた通りである。

1）英語全般についての態度　- 問1、問2
2）英会話力への憧れ　- 問3
3）海外への憧れ　- 問4、問5
4）英会話力やコミュニケーション力についての考え方　- 問6、問7
5）他人との対面コミュニケーション　- 問8-1、8-2、問9-1、9-2
6）人前での緊張　- 問10-1、問10-2
7）英会話に必要なもの　- 問11-1、問11-2、問11-3

アンケートはこれまで4月と7月の2回行っているが、意識や考え方の変遷を調べる為なのでそれぞれの内容は全く変えていない。尚、質問項目やその順序、回答方法の詳細については、文末に参考資料として載せているアンケート用紙そのものを参照されたい。

3.調査方法

1回目の調査は2012年度4月初旬、各授業の初回に実施した。これは当クラスの授業内容が学生に影響を与えないうちにデータを取る為である（所要時間5分程度）。2回目の調査は7月末、前期授業の最後に当たる期末試験終了直後に実施した。これは受講して4カ月、授業数にして16回目に当たる（うち3回は中間試験と期末試験である。これは中間試験では実技と筆記試験を同日に、これに対して期末試験では実技と筆記試験を2日に分けて実施している為）。

4.質問とデータ分析

例年実施してきた記述データを主とした4回の調査（大味：2007、2010、2011A、2011B）と違い、今回は数値データのみで主観が入るものは無かった為、アンケート内容は筆者が入力した。データには学科、クラス名、選択コース名（学生は選択英語コース、又は各国語文化論コースのどちらかを選ぶ）、性別等も含まれていたので、それぞれのサブカテゴリー別の分析も可能であったが、今回は以下の3つの理由により割愛した。つまり、1）英語Ⅰと英語Ⅲ各コースの平均履修者数が大きく異なっていること（登録上は21名対15名だが、学期末の実質は18名対6名）、2）英語Ⅰには当クラスを前年度既に経験していた再履修学生が数名含まれており、今年度4か月間の授業の影響を数値データで必ずしも正確に反映出来ないこと、3）英語Ⅰの学期修了率が39％と低く、回答者も同様に激減してしまい（⑧で14名から5名、⑨で14名から9名、そして⑩で15名から5名。全体で43名から17名。）、4月と7月のデータの比較が適当でないことの3点である。その為今回は参考までにクラス別のデータは示すものの、基本的には英語Ⅲの4クラスの合計と英語Ⅰの3クラス合計とを、それぞれ4月と7月のデータを相互に比較して論じる。ちなみに指標数値はいずれも7段階評価（最小値1、最大値7、中間値4）である。

4.1　英語全般について

まず英語全般に対する質問項目である。当アンケートでは問1「英語は好きですか。」、問2「英語は得意ですか。」に該当する。問1は文字通りに英語の好き嫌いを問うており、問2では英語力に対する自己評価、すなわち得手不得手を問うている。大雑把な質問だが、学生の学習動機に直接影響があるものでもある。ちなみにこの数値がプラスに変化しないのでは、当クラスを受講する意味はないと教員が考えている重要項目である。ここでの数値指標は「1：全然そう思わない～7：すごくそう思う」である。

表4-1-1　好き嫌い：クラス別

	問1．英語は好きですか。								
	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	Ⅲ総計	Ⅰ⑧	Ⅰ⑨	Ⅰ⑩	Ⅰ総計
問1．4月	4.6	4.0	3.7	3.1	3.8	3.2	3.0	2.9	3.0
／7月	5.2	4.6	4.6	4.1	4.6	4.2	3.6	3.0	3.6
数値変化	+0.6	+0.6	+0.9	+1.0	**+0.8**	+1.0	+0.6	+0.1	**+0.6**

＊丸数字は各英語のクラス名を表す（以下同様）。

表4-1-2　自己評価力：クラス別

	問2．英語は得意ですか								
	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	Ⅲ総計	Ⅰ⑧	Ⅰ⑨	Ⅰ⑩	Ⅰ総計
問2．4月	3.3	3.0	2.7	2.3	2.8	1.9	1.6	1.5	1.7
／7月	3.8	3.1	3.2	2.8	3.2	3.4	2.1	2.0	2.5
数値変化	+0.5	+0.1	+0.5	+0.5	**+0.4**	+1.5	+0.5	+0.5	**+0.8**

まず4月当初のデータを見ると、問1と問2の両方で、また英語Ⅲと英語Ⅰの双方で先述のプレイスメントテストの成績順にきれいに並んでいる。ちなみにこの順序は7月のデータでも変わっていない。興味深いのは問1の好き嫌いの数値より、問2の得意不得意の数値が全て1.0以上の開きがある事である。つまり7クラスに共通するのは、英語科目は好きでも嫌いでもない程度にも拘らず（英語Ⅲで3.8、英語Ⅰで3.0）、一方で英語科目に対して強い苦手意識があることが読み取れる（英語Ⅲで2.8、英語Ⅰで1.7）。

さて次に7月までの数値変化を見てみると、問1では英語Ⅲクラスで＋0.8、英語Ⅰクラスで＋0.6と数値が上がっており、また問2ではそれぞれ＋0.4、＋0.8とこちらも上昇している。あくまで自己評価の主観的な数値ではあるが、英語に対する学生の印象はこの4カ月間で概して良くなっており、また苦手意識も改善している様である。総じて学習効果は上がっているとみて良い。

4.2　英会話力への憧れ

次に問3「英会話が出来たらいいと思いますか。」で英会話力への憧れについて聞いた。先の問1、問2で尋ねた好き嫌いや得手不得手に拘わらず、昨今の日本人学生であれば一概に高い憧れを持っているはずだと予想していたが、果たしてその通りであった。ちなみに今回の全質問のうち、ほとんどのクラスにおいて最大の数値が出ている（表4-2-1）。ここでの数値指標は「1：全然そう思わない～7：すごくそう思う」である。

表4-2-1　英会話への憧れ：クラス別

	問3．英会話が出来たらいいと思いますか。								
	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	Ⅲ総計	Ⅰ⑧	Ⅰ⑨	Ⅰ⑩	Ⅰ総計
問3．4月	5.6	6.1	5.9	4.9	5.6	5.4	5.5	5.1	5.3
／7月	6.0	6.4	5.9	5.7	6.0	5.6	5.6	7.0	6.1
数値変化	+0.4	+0.3	+0.0	+0.8	**+0.4**	+0.2	+0.1	+1.9	**+0.8**

まず4月のデータを見てみると、英語Ⅲで5.6、英語Ⅰでも5.3と比較的高い数値が出ている。先の問1や問2に比べても学生の関心の高さが窺える（問1では英語Ⅲで3.8、英語Ⅰでも3.0、問2は英語Ⅲで2.1、英語Ⅰでも1.7）。これは言い換えると、学生の英会話への憧れは、学校英語や受験英語、また検定英語に対する自分達の自己評価や好き嫌いとほとんど無関係であると言っていいだろう。

しかし数値変化で見ると元々数値が高かったせいか、先の問1、2と同様に一応変化が見て取れ、英語Ⅲでは＋0.4と若干プラスぐらいの結果であった一方、英語Ⅰでは＋0.8と総計はやや高いものの、英語Ⅰ⑩のクラスだけが突出して全体の数値が大きく動いており、人数が激減している影響が大きいと推測される。全体として授業活動として英会話を既に練習している為、既に若干の満足度が学生の間にあったのか、あるいは英会話力への憧れそのものにあまり変化が無いのかもしれないと思う。この種類の質問は記述解答にしなければ、学生の意識の分析は困難であると感じた。

一方で特記すべきはこの英会話力の憧れ指数の高さである。ペーパーテストの成績に関わらず、また学年や専攻にも拘わらず一定して高い数値を示している、学生間のこの学習意欲を大学の英語教育に活かさない手はないだろう。ともすれば検定試験や文法、作文、スピーチ等に終始しがちな必修英語を、普遍的な学生のニーズに応える様に改編出来れば、また新しい切り口やカリキュラムが生まれ、よりダイナミックな英語教育が行える可能性を示唆しているように思われる。

4.3　海外への憧れ

次に尋ねたのは学生の海外旅行や海外留学への希望についてで、問4「海外旅行は。」、問5「海外留学は。」に該当する。問4、5の選択指標は（1：全然したくない～7：是非したい）である。教員側の意図としては英会話力の向上や、異文化適応能力、コミュニケーション能力の向上が、海外へ出て行くという学生の積極性にプラスに働くと思っていたが、結果は以下の表4-3-1、表4-3-2の通り、予想に反して４か月間の授業では期待した効果は出ていない。

表4-3-1　海外旅行への憧れ：クラス別

	問4．海外旅行は。								
	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	Ⅲ総計	Ⅰ⑧	Ⅰ⑨	Ⅰ⑩	Ⅰ総計
問4．4月	5.6	5.9	5.6	5.1	5.5	5.4	5.5	5.1	5.3
／7月	5.8	6.1	6.1	5.0	5.7	4.4	6.0	6.4	5.6
数値変化	+0.2	+0.2	+0.5	-0.1	**+0.2**	-1.0	+0.5	+1.3	**+0.3**

表4-3-2　海外留学への憧れ：クラス別

	問5．海外留学は。								
	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	Ⅲ総計	Ⅰ⑧	Ⅰ⑨	Ⅰ⑩	Ⅰ総計
問4．4月	4.1	4.8	4.7	3.6	4.3	4.7	3.4	3.1	3.7
／7月	4.6	4.7	4.9	3.6	4.4	4.0	3.8	3.0	3.6
数値変化	+0.5	-0.1	+0.2	+0.0	**+0.1**	-0.7	+0.4	-0.1	**-0.1**

まず4月の数値データを見てみると、海外旅行への関心は英語Ⅲで5.5、英語Ⅰでも5.3と比較的どちらも高い。興味深いのは、これらの数値が先の問3の英会話への憧れとほぼ同数値であることである（問3では英語Ⅲで5.6、英語Ⅰでも5.3）。一方で留学となると心理的な敷居が高いのか数値は共に落ち、英語Ⅲで4.3、英語Ⅰでは3.7である。

次に数値変化を見てみると、先の問3に比べてもここでの影響はさらに小さく、問4で英語Ⅲが+0.2、英語Ⅰで+0.3、問5では英語Ⅲで+0.1、英語Ⅰでは+0.1と数値的にはほとんど変化はない。教員側としては英会話力や異文化適応能力の向上が、学生の海外への関心と結びつくと思っていたのだが、4カ月では短すぎたのか、あるいは1年を経ても変化しないのかは不明だが、4カ月の受講期間では特にプラスの影響は見られないようである。取り敢えずは1年受講後の結果を

待ちたいと思う。

またここで問題提起したいのは、先の英会話力への憧れと同様、海外旅行への憧れを英語教育に取り込めないかという点である。海外旅行で必要になる英語は、受験英語や検定試験用の英語とは異なり、語彙や表現がある程度固定しているものであり、学習範囲もそれほど広いものでもない。実際の場面で応用が効く英語表現や英会話練習ならば、現時点での学生の英語力に拘わらず、学習動機を高めることが出来るのではないかと思われる。と同時に、現在の大学の一般教養課程の英語教育では、学生側の英語のニーズに応えられていないのではないかという反省もある。無論、これは当大学だけの問題ではなく、日本の大学の英語教育全般に共通する問題であると考える。

4.4　英会話力やコミュニケーション力についての考え方

次に学生自身の英会話力についての自己評価、またコミュニケーションにどれだけ英語が必要と考えているかについて尋ねた。問6「自分の英語は外人に通じると思う。」は、学生自身の英語力評価であるとともに、自分の英語が使えるかどうか、自分の英語の実践力にどれだけ自信があるかどうかについての質問である。当授業では日本人学生同士で会話練習を行っており「外人」と話す機会は無いのだが、このような授業を繰り返していく中で、「外人に通じる」という実感を学生が持つようになれば、この授業としては成功であると教員として考えていた。

また問7「英語が通じなくても外人とコミュニケーションは可能だと思う。」はともすれば英文の正確さこそコミュニケーション力であると考えがちな日本人学生に、英語のような共通言語が無くても意思疎通が可能であることを、授業内のペアワークその他で実感させている為、受講するにつれて学生の意識が変化してくれることを教員としては期待していたのである。

しかし同時に正直言えば、これらの要素について学生の意識が変わるにはかなり時間が掛かると考えていた為、4カ月受講した時点では数値変化はほとんど無いと思っていたのだが、この設問についてはいい意味で期待を裏切られた。結果は以下の表4‐4の通りである。いずれも数値指標は「：1全然そう思わない～7：すごくそう思う」である。

表4-4-1　英会話力について：クラス別

	問6．自分の英語は外人に通じると思う。								
	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	Ⅲ総計	Ⅰ⑧	Ⅰ⑨	Ⅰ⑩	Ⅰ総計
問6．4月	2.4	2.5	2.1	1.7	2.2	1.6	1.8	1.7	1.7
／7月	3.4	3.1	2.6	2.2	2.8	3.0	2.7	2.0	2.6
数値変化	+1.0	+0.6	+0.5	+0.5	**+0.6**	+1.4	+0.9	+0.3	**+1.0**

表4-4-2　コミュニケーション力について：クラス別

	問7．英語が通じなくても外人とコミュニケーションは可能だと思う。								
	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	Ⅲ総計	Ⅰ⑧	Ⅰ⑨	Ⅰ⑩	Ⅰ総計
問7．4月	4.7	4.6	3.8	3.5	4.1	4.2	3.9	4.1	4.1
／7月	4.6	4.4	4.1	4.2	4.3	4.8	4.2	4.4	4.5
数値変化	-0.1	-0.2	+0.3	+0.7	**+0.2**	+0.6	+0.3	+0.3	**+0.4**

まず各問の4月の数値データを見てみると、問6では英語Ⅲで2.2、英語Ⅰでも1.7と非常に低い数値となっている。これは紛れも無く自分達の英語の実践性に対する自信の無さの表れであり、また自分達の英語がこれまで外国人に通じた経験が無かった為、もしくは試したことすら無かった為と考えられる。しかし一方で問7では英語Ⅲ、英語Ⅰ共に4.1と全く同じ数値が出ており、英語以外での外国人とのコミュニケーションの可能性については、具体的にその映像が想像出来なかったのか、判断し兼ねている様子が見て取れるが、特に否定的ではないようである。

次に数値変化は、問6で英語Ⅲで＋0.6、英語Ⅰで＋1.0と大きな数値変化が見られた。クラス毎に差はあるものの、英語Ⅲではいずれも＋0.5以上と学生の意識にプラス効果があったことがはっきりと表れている。英語Ⅰではクラスによりかなり数値が違うものの、いずれのクラスでも意識改善が起こっている様である。

一方で問7では、英語Ⅲではクラス間の隔たりが大きく総括が難しいが、プレイスメントテストで好成績を挙げているクラスの方が英語抜きのコミュニケーションに否定的なのに対し、寧ろ平均的な成績を上げている2クラスで肯定的な結果になっているのが興味深い。同時にレメディアルの英語Ⅰでは各クラスとも肯定的になっている。この英語Ⅲの上位2クラスの否定的な回答が、ペーパーテストを得意とする学生に特有の反応なのかどうかについては、今後記述式アンケートを併用して調べる他に手段は無さそうである。

4.5　他人との対面コミュニケーション

次の2つの質問項目では他人とのコミュニケーションの得手不得手を尋ねた。これはケータイ、スマホ、PC等のデジタル機器、インターネット世代に属する学生が、英語でのコミュニケーションや、異文化間コミュニケーション以前の問題として、そもそも対人コミュニケーションそのものを苦手にしているはずだという前提で作成した質問であり、知らない人と話すのが日本語でも元々不得手であると考えたからである。質問としては問8「知らない人に話し掛けられるのは。」と問9「知らない人に自分から話し掛けるのは。」で、上記の論点を明確にする為に、それぞれ日本語の場合と英語の場合と分けて尋ねた。

またもう一つの切り口として、話し掛けられる状態と話し掛ける状態とを分けたのは、受け身の状態と能動の状態とを分けてデータを取る為である。つまり話し掛けるきっかけを作るのが苦手な日本人は、一旦話し掛けられて話し始めてしまえば会話が行えるのに対して、自分から会話をスタートさせるのが苦手であろうという前提があったからである。ここでも数値指標は「1：

すごく苦手～7：全然平気」とした。

表4-5-1　他人との対面コミュニケーション　その１：クラス別

	問8. 知らない人に話し掛けられるのは（8-1. 日本語／8-2. 英語）。								
	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	Ⅲ総計	Ⅰ⑧	Ⅰ⑨	Ⅰ⑩	Ⅰ総計
問8-1. 4月	4.5	3.9	4.4	4.4	4.3	5.3	5.2	4.9	5.1
／7月	4.4	4.6	4.4	5.1	4.6	4.8	4.6	4.9	4.7
数値変化	-0.1	+0.7	+0.0	+0.7	**+0.3**	-0.5	-0.6	+0.0	**-0.4**
問8-2. 4月	2.5	2.9	2.5	2.0	2.5	2.1	2.8	2.0	2.3
／7月	3.1	3.0	2.7	2.9	2.9	2.6	1.6	1.6	1.9
数値変化	+0.6	+0.1	+0.2	+0.9	**+0.4**	+0.5	-1.2	-0.4	**-0.4**

表4-5-2　他人との対面コミュニケーション　その２：クラス別

	問9. 知らない人に自分から話し掛けるのは（9-1. 日本語／9-2. 英語）。								
	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	Ⅲ総計	Ⅰ⑧	Ⅰ⑨	Ⅰ⑩	Ⅰ総計
問9-1. 4月	3.6	3.1	3.2	3.6	3.4	4.6	4.3	4.3	4.4
／7月	3.5	3.3	3.6	4.3	3.7	4.8	4.1	3.8	4.2
数値変化	-0.1	+0.2	+0.4	+0.7	**+0.3**	+0.2	-0.2	-0.5	**-0.2**
問9-2. 4月	2.1	2.3	1.8	1.6	1.9	1.9	2.2	1.7	1.9
／7月	2.8	2.2	2.3	2.6	2.5	2.6	1.8	1.4	1.9
数値変化	+0.7	-0.1	+0.5	+1.0	**+0.6**	+0.7	-0.4	-0.3	**+0.0**

まず4月当初のデータから述べると、概ね予想通りであった。すなわち知らない人に話し掛けられる方が、自分から話し掛けるより楽であり、これは日本語英語を問わないという事である（英語Ⅲでは日本語で4.3対3.4、英語で2.5対1.9、英語Ⅰでは日本語で5.1対4.4、英語でも2.3対1.9）。

しかし7月のデータに関しては、問8「知らない人に話し掛けられるのは。」では英語Ⅲと英語Ⅰで結果が正反対となった。まず英語Ⅲでは英語、日本語双方で＋0.3、＋0.4と若干のプラス効果となったが、英語Ⅰではそれぞれ－0.4、－0.4となっており若干のマイナス効果が出ている。主因は英語Ⅰ⑨のクラスの数値が大きく下がっていることであるが、その理由については不明である。唯一思い付くのは4月の時点であまり考えずにアンケートに答えたものの、7月の時点ではしっかりと回答したのではということだけだが、人数の激減の影響が大きいのかもしれない。いずれにせよ推測の域を出ない為、学期終了後の最終結果と併せて再考したいと思うが、先述の項目と併せてここでも必要に応じて聞き取り調査も行った方が良いかとも考えている。

次に問9「知らない人に自分から話し掛けるのは。」は上記の問8とほぼ同じ結果であった。つまり英語Ⅲでは日本語より英語の方の数値が改善されており（それぞれ＋0.3、＋0.6）、英語Ⅰでは日本語、英語とも数値の改善は見られなかった（それぞれ－0.2、＋0.0）。こちらも現時点ではこれ以上の推測は無駄なので、学期末のデータが出揃うまでこれ以上の考察は控えたい。

4.6　人前での緊張について

次に尋ねたのは、問10「人前で話すのは。」である。これは文字通り、人前でどの程度緊張せずに話せるかである。これは生来他人の目を気にしがちで、完璧主義を目指しがちな日本人であれば共通の問題であろう。つまり外国人と英語を話す以前の問題で、そもそも日本語で話す場合でも、さらに例え相手が日本人でも人前で話すこと自体が苦手なはずだという予想のもとに設けた質問である。教員としてはこの苦手意識が授業を通じて改善されていれば、日本語でも英語でも段々平気になって来るはずだと予期していたのである。結果は表4-6の通りである。数値指標は「1：すごく苦手～7：全然平気」である。

表4-6　人前での話し：クラス別

	問10．人前で話すのは　（10-1. 日本語／10-2. 英語）。								
	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	Ⅲ総計	Ⅰ⑧	Ⅰ⑨	Ⅰ⑩	Ⅰ総計
問10-1. 4月	3.6	3.5	3.1	3.0	3.3	4.4	3.5	3.5	3.8
／7月	3.7	4.1	3.6	4.5	4.0	5.0	4.1	3.8	4.3
数値変化	+0.1	+0.6	+0.5	+1.5	**+0.7**	+0.6	+0.6	+0.3	**+0.5**
問10-2. 4月	2.7	2.7	1.8	2.1	2.3	1.7	2.4	1.7	1.9
／7月	2.9	3.4	2.2	3.2	2.9	2.8	2.1	2.4	2.4
数値変化	+0.2	+0.7	+0.4	+1.1	**+0.6**	+1.1	-0.3	+0.7	**+0.5**

4月当初のデータを見ると、問10 - 1の「人前で日本語で話す場合」では可もなく不可も無くと言ったところであるが、やや苦手に感じている様が見て取れる。英語Ⅲでは3.3、英語Ⅰでも3.8と、いずれも中間値4を下回っている。一方で問10 - 2の「人前で英語で話す場合」では、英語Ⅲで2.3、英語Ⅰで1.9と苦手意識がかなり強く出ているようだ。

数値変化の解析では、まず日本語の場合、英語Ⅲで＋0.7、英語Ⅰで＋0.5、英語の場合は英語Ⅲで＋0.6、英語Ⅰで＋0.5である。細かく見ればクラスによって改善度にバラつきはあるが、学生の苦手意識は概ね改善されている様である。

ここで注目すべきは英語ではなく、寧ろ日本語での意識であろう。と言うのも当授業では、日本語での発表は一切行っていない。発表する時の内容は全て英語での会話である。この数値変化の理由については推測の域を出ないが、日頃の授業を観察する限り、学生達は発表の前後に日本語で自分の気持ちや感想を思わず口にしたり、一方で様々な茶々を挟んでくる残りの学生と日本語で言葉を交わしたりと、実に様々なインターアクションが行われており、それが結果的に人前での緊張感が、いつの間にか日本語の方も軽減しているという事なのだろう。

4.7　英会話に必要なもの

最後の設問、問11「英会話に必要なものは何だと思いますか。」は、ワールドイングリッシュ（WE）についての質問を、その用語を出さずに具体的に尋ねたものである。すなわち日本人であればどうしても拘りがちな、1）正確な文法、2）豊富な単語力、そして3）ネイティブのような

きれいな発音等が、実際の英語でのコミュニケーションに於いては必ずしも必要ではないことを、授業活動を通して教員としては指導しているつもりなのだが、果たしてその意図が学生にどの程度伝わっているのかの検証である。予期したのは全てに於いてマイナスの数値であったが、4カ月では短過ぎたのか、結果は以下の通りである。数値指標は「1：全然そう思わない～7：すごくそう思う」である。

表4-7　英会話に必要なもの：クラス別

	問11. 英会話に必要なものは何だと思いますか。（11-1. 文法力／11-2. 単語力／11-3. きれいな発音）。								
	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	Ⅲ総計	Ⅰ⑧	Ⅰ⑨	Ⅰ⑩	Ⅰ総計
問11-1. 4月	4.7	4.7	4.9	4.3	4.7	4.6	5.0	4.6	4.7
／7月	4.7	4.5	5.0	3.8	4.5	4.8	4.6	3.2	4.2
数値変化	+0.0	-0.2	+0.1	-0.5	**-0.2**	+0.2	-0.4	-0.8	**-0.5**
問11-2. 4月	5.9	6.0	5.6	5.4	5.7	5.1	5.5	4.9	5.2
／7月	5.9	5.5	5.8	5.3	5.6	5.0	5.4	4.6	5.0
数値変化	+0.0	-0.5	+0.2	-0.1	**-0.1**	-0.1	-0.1	-0.3	-0.2
問11-3. 4月	5.3	5.4	5.3	4.7	5.2	5.1	4.8	4.6	4.8
／7月	5.2	5.3	5.6	5.2	5.3	4.6	4.9	5.4	5.0
数値変化	-0.1	-0.1	+0.3	+0.5	**+0.1**	-0.5	+0.1	+0.6	**+0.2**

数値変化の分析の前に特記すべきは、やはり4月時点での「単語力」での高い数値である（英語Ⅲで5.7、英語Ⅰで5.2）。但しここでの数値が、英会話力イコール単語力と考えているのか、もしくは自分達に単語力が不足していると考えているのかは、このデータからだけでは判断出来ない。次に「きれいな発音」とした発音の明瞭性についても、学生の必要度は高いと言えるだろう（英語Ⅲで5.2、英語Ⅰで4.8）。これは日本人に蔓延するネイティブ至上主義ともいうべき、英語発音はネイティブスピーカーと同じ発音でなければならないとする傾向と一致しているようであるが、予想した程高いものではなかった。一方でこの2項目に比べれば、「文法力」はこちらが当初予想した程、学生達は英会話力に於いてはあまり期待していないようである（英語Ⅲで4.7、英語Ⅰで4.7）。

さて次に数値変化の結果であるが、文法力、単語力については一応予想通りで、明瞭な発音については予想に反した。文法力は英語Ⅲで－0.2、英語Ⅰで－0.5と概ね軽減されているが、クラスによってはプラス値になっているところもあり、成果はバラバラである。

また単語力では英語Ⅲで－0.1、英語Ⅰで－0.2と若干軽減しているもののほとんど変わっていない。会話練習を通して必要な単語表現があまり多くないことを実感する反面、実生活で必要な語彙は受験英語等では目にしないことが多いので、学生からすればプラスマイナス０と言う所かもしれない。

さらに発音の問題については、英語Ⅲで＋0.1、英語Ⅰで＋0.2と僅かではあるが、学生は若干気にするようになっている様である。理由については不明だが、英語特有のRやL等の子音や母音の聞き分け、またどうしても発音上はっきり区別しなければ誤解される部分について授業中に

強調したのが裏目に出たのかもしれない。同時にクラスによって数値がバラバラなのが英語Ⅲと英語Ⅰ共通なので、この点についても今後、本当の理由を確かめる為に記述式回答を求める必要があると考える。

5.問題点

現時点で分かっているこの調査の問題点を挙げておくと、まずサンプルの数が一定していない事。つまり英語Ⅲの4クラスの受講人数と英語Ⅰの3クラスの受講人数が、前期学期終了時に既に大きく異なってしまったこと。また英語Ⅲと英語Ⅰの英語の基礎学力がほぼ両極端と言えるほどに違う為（英語Ⅲは上位クラス、英語Ⅰは下位クラス）、単純な比較対象がしにくいこと、さらに宿題として課している英文読解の内容やレベルが大きく違っている為に、その変数もまたデータに直接的または間接的に影響を与えている可能性を否定出来ないことである。この点についても、次回全てのデータが算出した時点で改めて言及したい。

6.最終アンケート調査に向けて

これまで4回の調査の欠点を補うべく、今回の中間報告では4月と7月の数値データの変化を元に分析を行ってきた。その結果学生の意識の変化が数値化され比較されやすくなった半面、その限界もまたいくつか露呈したようである。特にこちらの予想と反する数値が全クラスに見られる場合や、特定のクラスのみ数値が大きく異なる場合など、数値データだけでは分析が不可能で、その結果被験者たる学生達本人に記述解答を求めるか、マイクを向ける必要も出て来ている。

またその際、これらの予想と矛盾するデータそのものを学生に直接開示して、その理由を直接質す方法も可能であると考える。結局のところ、教員である研究者は自分の主観抜きに自らの授業を顧みることは出来ないので、寧ろ学生の声を直接拾うインタビュー形式の方が、こちらで明らかにしたい論点を明確に解き明かせると思うし、こちらの手の内をさらけ出して学生自ら自分達の傾向について考えさせるのも英語教育たり得るのではないかと考えている。

いずれにせよ、今回の縦断的な数値分析を教員側の主観的な推測に終わらせないために、最終アンケート調査に向けて軌道修正が必要になってきたのが紛れも無い事実であり、後期終了後の実施までにさらに考察を重ねたいと思う。

7.終わりに

今回の調査は7クラスの学生100人以上の英語コミュニケーションに関する意識変遷を、1年掛けて縦断的に調べるものとしてスタートした。その為、本来ならば2学期終了後、すなわち1年後のコース終了後に全体像をまとめるべきものであるが、この度中間報告の形でまとめる場を頂き、関係者の皆様に感謝したい。

このような機会を頂戴したおかげで、調査の折り返し時期の夏季にこれまでのデータを検証し、分析や解析を掛けることで、調査そのものの軌道修正や調査方法の是非について様々な角度

で反省することが出来た。今後の調査の有り方もさることながら、最終的な調査自体の妥当性と精度を上げられると考えている。更に付け加えるならば、今回の執筆に当たって授業や学生像を今一度冷静に俯瞰することが出来た為、後期の授業内容や指導方針の修正にも非常に役立った。また同時に、研究者としても教員としても、その未熟さを痛感し恐縮するばかりでもある。

参考文献

大味　潤、「異文化教育を中心とした英語教育の実践例」、『総合政策学部総合政策研究紀要第16・17号』尚美学園大学総合政策学部、2009、p.95-p.108。

大味　潤、「尚美学生の英語ニーズと国際語としての英語についての考察」、『総合政策学部総合政策研究紀要第19号』尚美学園大学総合政策学部、2010、p.67-p.80。

大味　潤、「尚美大１年生の英語受容とそのニーズについての考察」、『総合政策学部総合政策研究紀要第20号』尚美学園大学総合政策学部、2011年3月(2011A)、p.1-p.15。

大味　潤、「再履修生が語るコミュニケーション型英語授業の長期的効果」、『総合政策学部総合政策研究紀要第21号』尚美学園大学総合政策学部、2011年12月(2011B) 、p.113-p.137。

アンケート調査（2012年度版）

学年　：□１年生　□２年生　□３年生　□４年生
性別　：□１．女性　□２．男性
学科名：□１．総合政策学科　□２．ライフマネージメント学科　□３．情報表現学科
コース：□１．選択英語コース　□２．各国語文化論コース　□３．不明

問１．英語は好きですか。

全然そう思わない　　すごくそう思う
1　2　3　4　5　6　7

問２．英語は得意ですか。

全然そう思わない　　すごくそう思う
1　2　3　4　5　6　7

問３．英会話が出来たらいいと思いますか。

全然そう思わない　　すごくそう思う
1　2　3　4　5　6　7

問４．海外旅行は。

全然したくない　　是非したい
1　2　3　4　5　6　7

問５．海外留学は。

全然したくない　　是非したい
1　2　3　4　5　6　7

問６．自分の英語は外人に通じると思う。

全然そう思わない　　すごくそう思う
1　2　3　4　5　6　7

問７．英語が通じなくても外人とコミュニケーションは可能だと思う。

全然そう思わない　　すごくそう思う
1　2　3　4　5　6　7

↓　↓↓　↓裏面に続く↓　↓↓　↓

問８．知らない人に話し掛けられるのは。

＜日本語で＞

すごく苦手　　全然平気

1　2　3　4　5　6　7

＜英語で＞

すごく苦手　　全然平気

1　2　3　4　5　6　7

問９．知らない人に自分から話し掛けるのは。

＜日本語で＞

すごく苦手　　全然平気

1　2　3　4　5　6　7

＜英語で＞

すごく苦手　　全然平気

1　2　3　4　5　6　7

問１０．人前で話すのは。

＜日本語で＞

すごく苦手　　全然平気

1　2　3　4　5　6　7

＜英語で＞

すごく苦手　　全然平気

1　2　3　4　5　6　7

問11．英会話に必要なものは何だと思いますか。

＜文法力＞

全然そう思わない　　すごくそう思う

1　2　3　4　5　6　7

＜単語力＞

全然そう思わない　　すごくそう思う

1　2　3　4　5　6　7

＜きれいな発音＞

全然そう思わない　　すごくそう思う

1　2　3　4　5　6　7

これで修了です。ご協力ありがとうございました。